

戦時中の絵本の研究—子ども像に注目して—

大阪芸術大学短期大学部 保育学科 准教授 森岡 伸枝

はじめに

現代では内閣府より幼児教育の無償化が発表され、どのような幼児教育政策を日本は進めていくのかが問われてきている。(拙論「道徳教育政策の動向と課題—保幼小連携の観点から—」『大阪芸術大学短期大学部紀要』第40号、大阪芸術大学短期大学部、平成29年)。

これまで申請者は第一次世界大戦後の文部省の絵本に関する政策を検討し、文部省は『子どもの絵本』を母親達に配布し、絵本を「乳児、幼児」にとつての「教科書」であると説き、「道徳的に健全」な絵本を選択するように啓蒙していたことを明らかにした。また、文部省社会教育課職員が各地の文部省主催「母の講座」で講義をし、文部省推薦事業で指定した絵本(以下、文部省推薦絵本と記す)を提示して絵本選択の基準を啓蒙して回っていたことがわかった(拙論「第1次世界大戦後における絵本の改善政策について—家庭教育の役割の変容に着目して—」平成25年、科学研究費：課題番号24730690「戦前・戦中の女子社会教育政策の変容～『成人教育婦人講座』から『母の講座』へ～」)。

そこで、本研究では国家の視点とは別に、出版社側はどのような絵本を作り、子どもに影響をもたらそうとしていたのか、ということが関心として浮かび上がったのである。

3. 研究の対象とする時期

本研究では1939年～1945年を戦時中ととらえ、新聞、『出版警察資料』『週報』『図書館雑誌』『社会教育』から、絵本に関する記事を収集し、人気や話題となった絵本のタイトルを収集することにした。また、文部省の子どもの読書調査(小学校低学年)の結果に上がっていた、子どもたちが多く読んでいた絵本も収集し、タイトルやその中身である絵や文体を分析していった。こうして、戦時中の子ども像が描き出されると考えた。

4. 明らかにしたこと

戦時中に出版された絵本は数多くあり、先行研究(鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ』ミネルヴァ書房、平成14年。永田桂子『絵本観・玩具観の変遷』高文堂、昭和62年)では、戦時色の強い絵本について分析されることが多く、本研究でも同様のことが確認でき、「強い」子どもや戦闘機が描かれる絵本も多数見受けられた。ただ、本研究では戦前と連続している側面をみることもできた。

すなわち、子どもの「生活」そのものを中心に描き、子ども自身が本来持っている良さを伸ばそうとする、大正期以降の児童中心主義の流れを汲む子ども像である。

例えば、農村の生活の四季をのびのびと描いたものや、子どもが遊んでいる姿を中心に描いたものもあり、子どもの絵も文体にもそこには国を意識させるような文言がないものもみられたのである。

おわりに

戦時中は内務省による読み物に対する統制が行われていた時代であり、絵本作家も幼児も戦時体制に基づく生活や文化を意識せざるを得なかったであろう。

だが、絵本は主に幼児を対象としたことから、発達段階への配慮で、政治的色彩を濃くしないで絵本を出版できる可能性が残されていたのではないかと考えた。

なお、本研究で得た知見は科学研究費助成事業(課題番号19K02608 基盤研究(C)「戦時中の文部省推薦図書(絵本)にみる幼児教育観—皇国民としての道徳心をめぐって—」)を取り組むにあたり、時代を把握するうえで示唆を得るものであった。

最後に、本研究にあたり調査にご協力くださった大阪府立図書館国際児童文学館の皆様へ感謝申し上げます。